



7月 ちびっこの森通信 vol.86

☆☆今月のテーマ☆☆

- ・十分な休息を取りながら、健康に過ごす
- ・夏ならではの水遊びを楽しむ



ひよこぐみ(0歳児)だより



園の生活リズムにも馴染んできたことから最近では身の回りのもので興味関心のあるところにハイハイや伝え歩きで積極的に移動する姿が見られるようになってきました。目下のところ手洗い場がお気に入りのよう。また、音に敏感で音の出る玩具も対象の一つで音の鳴る箇所へ耳を近づけたり、身体でリズムを取ったりと楽しそうです。他にも、毎日の会やおやつの際に奏でられるピアノの音にも聞き耳を立てて手拍子をする、微笑ましい姿が印象的です。発語も喃語ではありますが、こどもたちや保育スタッフのやりとりから「まんまんま〜」や「あ〜い!」といった声が聞かれ、これからの成長が楽しみな限りとなっています。今後もその成長を見守っていきたいと思います。



うさぎぐみ(1歳児)だより



先月は「歯と口の健康週間」で歯みがき練習や「時の記念日」で時計づくりと行事盛り沢山。そんな中でもクッキング教室ではまな板の上で旬の青紫蘇を包丁でトントン切り分けたり、梅干しをフォークで押しつぶしたりとリアルままごと遊びが好評でした。甘辛煮つけの高野豆腐の味にトッピングの青紫蘇梅干しがアクセントとなり、給食では好評だったのが何よりでした。室内では型はめ遊び、ペットボトルの穴にストロー通し、また大きなピースのジグソーパズルなど頭と手先を使う知育玩具で楽しむ姿が見られます。お友だち同士でも笑顔のアイコンタクトにはじまり、追いかけてこなどの関わり合いの場が増えてきているのでよく見守っていきたいと思います。



ぱんだぐみ(2歳児)だより



夏前からこのところ毎年取り組んでいるのがトマトジュースのカゴメさんから提供いただいたトマト苗を植樹し、日々の水やりでお世話をする食農活動です。こどもたちは最初は茎の高さはさほどでもなかったのに段々と伸び、こどもたちの腰回り辺りまで成長すると黄色の花が咲き、小さな実をつけるまでに成長していく様を目を見張り、「大きくなったね!」と驚きと喜びを感じながら成長を見届ける日々になっており、命を育むという心の育ちになれば幸いです。室内では数十ピースのジグソーパズルも何とか完成まで頑張る姿が見られたり、新聞遊びでは想像性豊かにオリジナルな衣装や帽子づくりに勤しむ姿が見られたので大事にしていきたいと思います。今月から水遊びがはじまりますが、水に馴染み、涼をとり、暑い夏を乗り切っていきたいと思います。

～保育のポイント～

人間には、(三次元的で肉体的な)左脳と(高次元的で精神的な)右脳があります。これまでの教育は主に左脳に偏重した価値観で例えば、(1)親がこどもを見る基準を設けたり、(2)他の子と比較して我が子を見がちであるためにどちらかと言えば競争や対立を生み出しやすい傾向に陥りがちです。これに対して右脳教育は、心を育てることを大切にし、人への愛と一体感を重く見ることに重きを置いています。こどもをリラックスさせる、心の子育てをする6つの事項を取り入れることにより親子がリラックスして毎日が過ごせるポイントをご紹介します。①こどもの短所を見ない。長所を見つけて褒める。②今の姿を出来上がった姿と見ない。これからますますよくなると思う。③完全主義で育てない。不完全でよい、今できなくてもよい、と思う。④比較しない。わが子はわが子の個性で伸びていると思う。⑤学力中心で育てない。どんな成績を取ってきても、努力を認め、褒める。⑥そのまま100点と見る。マイナスの評価をせず、こどもの今の姿をそのまま受け入れる。今までの親が子をマイナスに見、マイナスの言葉をかけている間は開けなかったこどもの心が開けることにつながります。その結果、こどもの性格が穏やかで、人に優しくなるばかりか、能力まで変わってきます。今まで理解力、吸収力、記憶力が悪いと思っていた子が右脳が開けイメージによる記憶や計算力といった分野で能力が発揮され、にわかには吸収力のよい賢い子に変身することに繋がるのです。このことは大脳生理学者で右脳研究で著名な品川嘉也先生の左脳と右脳の学習量の比率は1対100万だと言われていることから理解できます。しかも、この右脳が優位に働きやすい時期が0〜6歳までで、それを過ぎると使いにくくなることから右脳教育の重要性をご紹介させていただく次第です。～「右脳教育」で子どもは変わる (七田真著)より抜粋～



給食だより



人の味覚は生理学的に、甘味・酸味・塩味・苦味・うま味の5種類で一般的に五味または基本味と呼ばれています。人は食べ物を口に、舌の表面にある味蕾(みらい)※という器官を経、狭義的には味を感じ取るのが一般的。世界のミクニ"さんが「味覚の発達には12歳がピーク」の中で味覚と脳の発達との関連性に触れられ、(ファストフードの急激な台頭で家庭料理がおざなりになる現状を何とかしたいという思いで)味覚を育てることはこどもたちの脳の発達や五感を磨くことに繋がると言及されており、幼少期の育みのアプローチの一つとして味覚教育をご紹介します。味蕾は食べ物に含まれる五味をキャッチし、神経細胞を通じて「甘い」や「酸っぱい」と知覚する機能を有しています。それ以外にも目で見る視覚、香りをかぐ嗅覚、焼き立てパンを触って感じる触覚に食べている音などで感じる聴覚からも美味しさを感じることができることから味覚は五感を使って食べ物を楽しむことが大切と言えます。味蕾は8歳から急速に増え、12歳をピークに減少。ピーク時は約1万2000個なのが大人になると半減してしまふ。味蕾自体はいろんな食べ物を食べて経験値を積みまないと使いものにならないそう。これは小脳が8歳頃、大脳は12歳ごろに完成すると言われていて、人は8歳頃から急速に、物事への気づきが始まります。その頃までにどのくらいたくさん刺激を与えたかによって五感の働きによって脳の発達が促され、味蕾が味をキャッチする度に送られる信号も、脳の刺激となるのです。その五感を駆使することで「味」だけでなく、周囲や相手をよく観察できるようになって自然と想像力も働くようになり、気づきがあるということなので味覚教育を紹介させていただく次第です。

☆ **今月の唄** ☆

★ たなばたさま

★ トマト

☆ **行事予定** ☆

- ・英語教室…3日
- ・七夕会…5日
- ・身体測定…16日
- ・体操教室…23日
- ・誕生日会…24日
- ・避難訓練…29日
- ・リミック教室…30日